

ネズミに いたずらされた弥生土器

調査：唐古・鍵遺跡 第34次調査 時代：弥生時代中期

令和2年は、「ねずみ」年ということで、弥生時代のネズミの話
をします。ネズミは、弥生時代、大陸から稲作の伝播^{でんぱ}とともにやっ
てきた動物と考えられています。唐古・鍵遺跡からもさまざまな動
物の骨に混じってネズミの骨が出土しています。この中には、クマ
ネズミやドブネズミ、ハタネズミの骨を確認することができ、それ
らのネズミの生息環境から、建物内、湿地、草むらなどの生息場所
が推測できます。

唐古・鍵ムラの人たちにとって、このようなネズミたちは身近な
存在であり、それを示す土器が見つかっています。唐古・鍵ムラで
は、女性たちが作業場のようなところに集まり、土器づくりをおこ
ないました。1つの土器を作るのに2・3日程度要し、その後その
土器を、1週間以上、作業場の風通しの良い暗がり乾燥させまし
た。この乾燥期間の初めは、土器の表面も湿っており、傷がつきや
すい状態です。このような状態の時に、ネズミが土器に飛びかかり、
傷をつけた土器がこの壺です。壺の胴部には、ネズミの爪痕^{つめあと}がくっ
きりと残っています。ネズミが何度も飛びつき、ずり落ちる時に
ついた2ヶ所の4本線がそれです。ネズミは、乾燥させている土器と
は知らず、壺の中にお米が入っていると思ったのでしょうか。弥生
の人たちもおおらかで、傷ついた土器を気にせず焼成^{しょうせい}しました。こ
の土器は、弥生の人たちと動物たちの関係を示す重要な土器といえ
るでしょう。